

五 虚榮虚飾の夢から覺めて

鳥がをりました。美しく見せやうとて、孔雀の羽を拾ひ集めて、身を飾り孔雀の群に入つて、意氣揚々として居ましたに、炯眼の孔雀に看破せられ、その羽を悉く抜き落されて、またもとの鳥になつて、大笑ひに笑はれましたとか。人はこの笑はれたる鳥に笑はれなかつたら、仕合せであります。實際あらゆる動物の中で、人間ほど見えを氣にするもの、外見を飾るものはありません。人間ほど大の見方は、他に類がないと申されます。人間一生何から何まで、この見えのために悶きあせつて、いつしか到着するのは、死の帳場である。それで終りかと思へば、尙ほ葬式墓場にまで、見えを張らうとします。驚いたではありませんか。この見えの充分張られたと思ふ時、人は身の前後左右を顧みて、誇り心に莞爾する。これが果して眞の莞爾でありませうか。

あらく笑止や。此頃の新聞雑誌で、著しく目につくものは、化粧品 of 廣告である。正體の知れぬ粉や水やに、譯もわからぬ色々な名稱をつけて、囃し立てるものですから、囃し立てられた婦人は勿論、男子までが、一生懸命に塗つたり付けたりはがしたり、それはく忙しいこと。それで少しでも美しく、見て貰ひたいとの心底らしい。皮一重にさへ、それほど苦心するのなら、肝心要の本體たる心は、嘸や美しくするだらうと思ひの外、皮膚の滑らかに光るに引きかへ、心は赤錆に錆たり。髪は櫛目正しきも、心の畠に菅て鋤さへ入れられず、香水の薰り芳しきにかへて、雑草毒草の生ひ茂れるこそ世にも憂たてき極まりではありませんか。處で、そんな人は唐土の横町に外ないさうです。けれどもお互に、教の鏡に心を映して、摺れよ磨けよ、その美を發揮せよ。皮一重を美しくせんとの、あの熱心の半分でも心の方面に心

掛けたならば、ほんに美しい人間様が出来て、眞からの莞爾は來ませう。

併し好きとなつては止められぬものか。世に茶人とか、數奇屋とか、云はれて得意がり、墓場からでも掘出したやうな缺茶碗に、百兩二百兩の大金を擲つ人も、日本にないではありませんが、これはまた、支那に於て、圖抜けた數奇屋古癖屋がありました。専らの評判者で、古物にばかり現を抜かし、古物といへば何でも彼でも、遠慮會釋なく買ひ求めるのであります。

ところへ、或日、古い破れ筵を持つて來た人に「これは昔、魯の哀公が、孔子聖人に教を受くる時、新に織らせて敷き用ひられたものだから、買つて下さい」と云はれ「如何にも」と數多の田地を賣り拂つて、其の金で、一の破れ筵を買ひました。次には竹杖の古ぼけたのを持つて來て「これ孔子よりもズツと古い、周の文王が、北狄の難を避くる時、この杖一本を力に、邠の國を立ち去られたものですから、貴公是非買つて下さい、命の柱ともなりませう」と、焚き付けられて「いかにも古い珍らしいもの、買はねばなるまい」とあつて、家財悉皆と取換て、非常に大事にして居ました。

すると今度は一つの古腕を持つて來た。「これこそは、太古三皇五帝の中でも、舜と申す、有難い名高い天子様が、父の瞽叟に御飯を差上げて、孝行を盡された御腕だから、周の時代より、もつと古いものです。是非お購求めを願ひたい。とても貴公より外に、之を買ふ力量のあるものは、御座いません」と煽ぎ立てられ、妻子の忠告も聴き入れず、男は乘氣になつて「俺が買はねば買ふ者もあるまい、俺も大分物持ちになつたぞ」と、家も何も賣り飛ばしその古腕を手に入れて、獨りホクホク顔でありましたが、お蔭で家も田地も何もありませんから、勿論食へることも出來ぬ。家族妻子は離散して了ひ、男はそろく、哀公の古筵を身にまとひ、文王の竹杖をつき、舜のお腕を引

抱へ、人の門邊に立たねばならぬことになりましたと。

遠い支那の古噺ではない、近い日本の今の世に、古い古物好きでなく、新しい新物好きがありはしませぬか。流行を追うて、新しい物にのみ浮身をやつし、妙に新しがる人の、身の果ては、さて如何でしやう。これが當時流行の新型だの、新模様だの、是非買つて下さい、貴嬢でなければ買ふ人もないなど、焚き付けられ、煽ぎ立てられては、躍起になつて、親をいぢめ、夫を泣かせ、子を迷はす人はありませんか。男子とても、世の中に酒と女は敵なり、とは云ふものゝ、何卒かたきに巡り會ひたい、となつて來ては仕方がありませぬ。

「淨土を口にし、娑婆を心にす」とは、宏法師の『往生要集』に申された語である。道を論じ、道を語り、道を喜ぶも、みな口先のことに止つて、その本心は名聞と利養とに走る。鍛冶屋拍子かトンチンカンの尻抜け藝當。まことに恐れ入つたる次第。淨土を口にするも、その目的は御慈悲を賣らんとするのでないか。娑婆生活のために佛を賣る。「心得て居ながら滑る雪の道」。「俺も大分物持になつたぞ」とんだ物持にならぬやう。誠心一番、虚榮虚飾の夢から醒め出でなくては、本間の道は得られませぬ。